⑨7 入院時食事療養費・入院時生活療養費

入院時食事療養費・入院時生活療養費

【IV-6(効率化等による制度の持続可能性の向上/医薬品等の適正評価)-⑤】
入院時の経腸栄養用製品の使用に係る給付の見直し 骨子【IV-6(6)】

●入院時の経腸栄養用製品の使用に係る給付の見直し

改 定

【食事療養及び生活療養の費用額算定表】

第1 食事療養

1 入院時食事療養 (I)	<u>イ 入院時食事療養 (I) 1 (1食につき)</u>	640円
	<u>ロ 入院時食事療養 (I) 2 (1食につき)</u>	575円(新)

注1 イについては、(略)食事療養を行う保険医療機関に入院している患者について、当該食事療養を行ったときに、1日につき3食を限度として算定する。

注2 ロについては、(略)食事療養を行う保険医療機関に入院している患者について、当該食事療養として流動食(市販されているものに限る。)のみを経管栄養法により提供したときに、1日につき3食を限度として算定する。

注3 別に厚生労働大臣が定める特別食を提供したときは、1食につき76円を、1日につき3食を限度として加算する。ただし、ロを算定する患者については算定しない。

注4 略

入院時食事療養費・入院時生活療養費

【Ⅳ－6(効率化等による制度の持続可能性の向上／医薬品等の適正評価)－⑤】
入院時の経腸栄養用製品の使用に係る給付の見直し 骨子【Ⅳ－6(6)】

●入院時の経腸栄養用製品の使用に係る給付の見直し

改 定

2 入院時食事療養(Ⅱ)	<u>イ 入院時食事療養(Ⅱ) 1 (1食につき)</u>	506円
	<u>ロ 入院時食事療養(Ⅱ) 2 (1食につき)</u>	455円(新)

注1 イについては、入院時食事療養(Ⅰ)を算定する保険医療機関以外の保険医療機関に入院している患者について、食事療養を行ったときに、1日につき3食を限度として算定する。

注2 ロについては、入院時食事療養(Ⅰ)を算定する保険医療機関以外の保険医療機関に入院している患者について、食事療養として流動食(市販されているものに限る。)のみを経管栄養法により提供したときに、1日につき3食を限度として算定する。

第2 生活療養

1 入院時生活療養(Ⅰ)

(1) 食事の提供たる療養	<u>① 食事の提供たる療養1 (1食につき)</u>	554円
	<u>② 食事の提供たる療養2 (1食につき)</u>	500円(新)
(2) 略	<u>入院時食事療養(Ⅰ)と同趣旨の改正を行う。</u>	

2 入院時生活療養(Ⅱ)	(変更なし)

入院時食事療養費・入院時生活療養費

【Ⅳ－6(効率化等による制度の持続可能性の向上／医薬品等の適正評価)－⑤】
入院時の経腸栄養用製品の使用に係る給付の見直し 骨子【Ⅳ－6(6)】

●入院時の経腸栄養用製品の用に係る給付の見直し

「流動食のみを経管栄養法により提供したとき」とは、当該食事療養又は当該食事の提供たる療養として食事の大半を経管栄養法による流動食(市販されているものに限る。以下この項において同じ。)により提供した場合を指すものであり、栄養管理が概ね経管栄養法による流動食によって行われている患者に対し、流動食とは別に又は流動食と混合して、少量の食品又は飲料を提供した場合(経口摂取か経管栄養の別を問わない。)を含むものである。

●特別食加算

- ・流動食(市販されているものに限る。)のみを経管栄養法で提供する場合には、特別食加算は算定不可とする。
- ・治療食に「てんかん食」追加。

てんかん食とは…難治性てんかん(外傷性のものを含む。)の患者に対し、グルコースに代わりケトン体を熱量源として供給することを目的に炭水化物量の制限及び脂質量の増加が厳格に行われた治療食をいう。ただし、グルコーストランスポーター1欠損症又はミトコンドリア脳筋症の患者に対し、治療食として当該食事を提供した場合は、「てんかん食」として取り扱って差し支えない。

入院時食事療養費・入院時生活療養費

●入院時食事療養費における標準負担額

(1食につき)

対象患者		食事療養標準負担額	
A	B、C、D以外の患者	H28.4.1～	360円
		H30.4.1～	460円
B	<ul style="list-style-type: none"> ・C、D以外の指定難病患者又は小児慢性特定疾病児童等 ・H27.4.1以前からH28.4.1日まで継続して精神病床に入院していた一般所得区分の患者等 		260円
C	低所得者II	過去1年間の入院期間が 90 日以内	210円
		過去1年間の入院期間が 90 日超	160円
D	低所得者I		100円

【入院時食事療養費・入院時生活療養費】

厚労省 疑義解釈（その1）平成28年3月31日

Q 栄養管理が概ね経管栄養法による市販の流動食によって行われている患者について、経口による食事の摂取を進めるため、経口摂取の量を徐々に増やし、経管栄養法による市販の流動食と経口摂取を併用する場合、この期間の食事療養費等は「流動食のみを提供する場合」の額ではなく、通常額を適用できると考えてよいか。

A 医師の指示に基づき、栄養管理を経口で行うための取組として、栄養管理計画に従い、経口摂取の量を徐々に増やしていく期間については、通常額を算定して差し支えない。

Q 自院で調理した流動食を使用した場合の入院時食事療養費等は、「流動食のみを提供する場合」の額ではなく、通常額を適用できると考えてよいか。

A 自院で調理した流動食等の場合は、通常額を算定できる。ただし、栄養管理が概ね経管栄養法による市販の流動食によって行われている患者に対し、市販の流動食とは別に又は市販の流動食と混合して、少量の食品又は飲料を提供した場合（経口摂取か経管栄養の別を問わない。）は、「流動食のみを提供する場合」の額の適用となる。

【入院時食事療養費・入院時生活療養費】

厚労省 疑義解釈（その1）平成28年3月31日

Q

市販の半固形タイプの経腸栄養用食品のみを経管栄養法により提供した場合の入院時食事療養費等は、「流動食のみを提供する場合」の額が適用されると考えてよいか。

A

そのとおり。この例のほか、市販の流動食に半固形化剤を添加し、それのみを経管栄養法で提供した場合についても、「流動食のみを提供する場合」の額が適用される。

Q

ケトン食は「てんかん食」とみなしてよいか。

A

患者の病態に応じて炭水化物量の制限と脂質量の増加を厳格に行ったものであって、医師の発行する食事せんに基づき、難治性てんかん（外傷性のものを含む。）、グルコーストランスポーター1欠損症及びミトコンドリア脳筋症の患者に対して治療食として提供した場合は、てんかん食として特別食加算を算定することができる。なお、栄養食事指導料の算定対象となる「てんかん食」についても、これと同様の考え方とする。